

この新しい博物館の「辞書」には、「常設展示」という言葉はない。はじめから常設・特別・企画などといった既成の展示構成の枠組みから、自由である。

展示は、陳列ではない。実物、レプリカ、グラフィック、あるいは文字であろうと、すべては「情報」の展開である。考古学の情報は、死せる情報ではなく、常に躍動している。多くの歴史を物語ろうとしている、そうした遺物や遺構の口を封じてきたのは、他ならない博物館自体であり、学芸員自身ではなかったか。

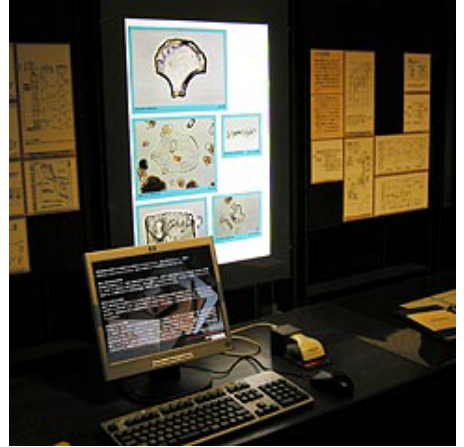
例えば、ある一つの土器は「 $\cdot\cdot$ 式土器」として命名された型式名を持つが、何時（考古年代）・何処で（産地、分布圏）・誰が（性的分業、專業集団）・何を（粘土素材、混和剤）、何故（使用目的・方法）・どのように（製作技術）などといった複雑かつ総合的な情報を自ずから蓄積している。

しかし、いったんケースや台に据え置かれた瞬間、多くの情報は削ぎ落とされ、型式名とせいぜい年代や出土地（産地、分布圏の情報ではない）が記されたプレートに閉じ込められてしまうのである。あらためて他の情報を展開しようとするれば、他に展示ステージを用意しなければならない。例えば、土器の背面に分布図や製作過程のパネルを付け加えるように。従来の博物館でも、ここまでのことは分かっている。だが、相変わらず展示は凍結されたままである。だから、常設展示をなくそう。

問題は、その次に進めるかである。我が考古博では、このような多面的な情報を最大限引き出すための展示手法の工夫と共に、「常に新しい情報を展示する」という造語として「常新展示」という概念を提案する。展示手法では、両面見学可能な展示空間において、一つの土器を中心に据え、片面では「編年」を表現する土器の組合せ、一方の面では「組成」を表現する土器の組合せ、といった展開構成などはその一例である。

こうした構成は、「交流」、「地域性」など個別テーマを想起すれば、幾通りにも展示変化が可能であることが容易に理解できるであろう。そして、本質的な「常新展示」の発想は、展示品やパネル等の構成、組合せを替えることによる可変的な情報展開を、構造的かつシステム的に行うことを意味している。展示品に限らず、映像や音響等による展開もしており、例外は何一つない。

博物館では、「展示替え」と言うのと相当の労力を要する仕事だと、誰もが無前提に暗黙の内に考えている。しかし、この常識は、ほとんど学芸員のいい訳の材料に過ぎない。展示品などがケースの中で転倒したり、曲がったままに放置された博物館が枚挙にいとまがないように、学芸員が一日に一度も展示室を見回ることのない、あるいは見学者を案内して回ることのない博物館にとっては、展示替えは数年に一度あるかないかの一大事となる。しかし、展示替えと云って大袈裟に構えることは何もない。転倒したり曲がった展示品を直す



に構えることは何もない。転倒したり曲がった展示品を直す
手間ほどで、常に新たな情報を展示することは可能なのである。
(北郷泰道)